

再考察の必要なワイルド童話創作の意図と意味

井村 君江
(明星大学教授)

『幸福な王子その他の物語』（5篇）は1888年5月、ワイルド33歳の時、『柘榴の家』（4篇）はそれから4年後の1891年に刊行されている。一般に童話といわれるお伽話ぶりのやさしい心温まる話ばかりでなく、子供に理解しづらい人間に対する皮肉な見方や社会風刺の物語もあり、また表現の上でも装飾的で知的な言い回しが多かったりする。こうしたところから9篇の作品は、大人向きの芸術童話(Kunstmärchen)、詩人が童話という形式を借りて書いた幻想物語(Contes fantastique)、詩人の書いた散文詩(poetic prose)と言われている。たしかにワイルドの童話は、エキゾチックな美とケルトの幻想とアンデルセン風のものらしい情趣が交じり合っただけで詩的である。内容からみると特色は次の三点になる。 (1) キリスト教的な色彩の濃いもの……「幸福の王子」「わがままな巨人」「若い王」「星の子」。奇跡や神の救いが行われた印として杖にバラの花が、不毛の地にも花が咲く、という聖者伝説(ジャック・ヴォラジエ)を踏まえ、キリスト教の愛と献身の尊さを描いたもの。(2) 異国的な美のあるもの……「スペイン王女の誕生日」「漁師とその魂」。象徴的で、詩的な幻想性のつよい物語。(3) 風刺性の強いもの……「ナイチンゲールとバラ」「忠実な友だち」「すばらしい打ちあげ花火」。物ごとを自分中心に考える我欲と虚栄心のつよい人物への風刺と皮肉。

童話というものが本来、美を主体とする奔放なファンタジーを駆使して作りあげた物語であるとすれば、著者のもつ詩人的資質にこの形態がよく合って、格調の高い美の世界が構築されている。しかし「ベルメル・ガゼット」紙や友人 H. Kerssley の、どのような人を喜ばすために書いたかとの質問に、ワイルドが「これらの物語はロマンスに仕立てるために、空想的な形の中にいれた散文の作品である。半ばは子どものために、半ばは子どものように驚きと喜びの感情を失わず、微妙で不可思議なものの中に単純さを見つげられる大人のために書かれた」と答えたことは知られているが、この言葉はいつものワイルド特有の表現として奥に含む意味、すなわち人間ワイルドの面から考える必要があると思う。

「半ばは子供のため」と言うが、最初の童話集はシリル2歳ピアノ1歳の時、第二集目は6歳と5歳の時である。まだ1歳のピアノに、一作目の童話が判ったかどうか。もちろんワイルドの童話執筆の動機には、子供の誕生が大きい。更に背景を考えてみると、

この時37歳のワイルドは、雑誌 *The Woman's World* の編集をしており“Children's Dress in this Century”という子供に関する文章などを寄稿している。また妻コンスタンスが童話を書いて *There was Once—Grandmother's Stories* を単行しているし、そして実際にこの年、Grandmother にあたる Mary Hare Hemphill が亡くなっている。幼少のワイルドは祖母の語るアイルランドの昔話を聞いていたであろう。また母 Francesca はアイルランドの民間伝承を収集再話した *Ancient Legends, Mystic Charms and Superstitions of Ireland* を単行しているが、それは彼女が *Happy Prince* を出す1年前であった。こうしたワイルドの周囲、実生活のなかにこの時期、童話執筆へ彼を駆り立てる必然が強かったことを、見逃してはならないと思う。ワイルドの童話を北歐神話からまた異国情緒からのみ解釈しがちであるが、生れ育ちその血に持っていたケルトの要素から見ることも大切であろうし、象徴的に寓話としてのみ解釈しがちであるが、実生活のなかからの必然の解釈も必要と思う。たとえば幸福の王子の「高い塀のめぐらしてある庭」や、わがままな巨人の貧しい者を排除した「塀の中の美しい庭」などには、幼いころワイルドが実際によく遊んでいた、ダブリン市中のメリオン・スクエア通りの中心にある高い塀で囲まれた広大な庭の映像が重ねられている。童話はワイルドの幼少時の郷愁にも繋がっていると考えられるのであ。

「父はぼくたち向けに作った妖精の話を、いつも語ってくれました。薬剤師が窓辺においた色つき水が入ったビンの中に、妖精たちが住んでいて、窓からさす光にさまざまに姿をかえたり、夜になるとビンから出てきて、誰れもない薬屋の店の中で踊ったり、丸薬を造ったりするのです。シリルが語っている思い出であるが、これらの話は大型自筆ノートに書かれていて、それを毎晩のようにワイルドはベッドに持ち込んで読んで聞かせていたと言うが、このノートは1895年の春、第一裁判がひらかれた時、ロンドンのタイト・ストリートの家財道具と一緒に売却され、現在はアメリカ、ニュージャージーのあるコレクションに入っている。童話集に収められている作品には妖精が登場しないし、この薬ビンの妖精の話は収録されていず完成しているのかどうか判らず残念であるが、このノートを見ればその謎が解けるかもしれないし、童話創作の違う意味も解釈も判ってくるのではなかろうかと思っている。

